18世紀ドイツ語圏における句読法とその翻訳可能性（３）
ゲーテのいわゆる『ウェルテル』における句読法
Interpunktion in den deutschsprachigen Ländern im 18. Jahrhundert (3)
Zeichensetzung in Goethes „Werther“

宮谷　尚実
MIYATANI Naomi

18世紀ドイツ語圏における句読法の一断面を、ゲーテ『若きヴェルターの悩み』におけるダッシュ（Gedankenstrich）を手がかりとして明らかにする。初版（1774年）と改訂版（1787年）を比較すると、改訂版においてダッシュの使用回数が顕著に増え、補助符号も多様化している。『ヴェルター』におけるダッシュのさまざまな機能を、アーデルング『ドイツ語正書法完全手引』も参照して分析することにより、イギリス多感主義文学からドイツ語圏にも取り入れられたこの補助符号の系譜が浮き彫りになる。読み手や聴き手の思考や共感を要求する「沈黙の記号」としてのダッシュを日本語の縦書き文で再現することは容易ではない。音楽と言語の狭間に位置する句読法を日本語への翻訳においていかに反映させるか、その取り組みを提示することで今後にむけた翻訳の課題や可能性を提示する。

キーワード：ゲーテ、『若きヴェルターの悩み』、句読法、ダッシュ、18世紀ドイツ語圏

はじめに

「言語は、その諸要素のうち、句読点において最も音楽に近い」[1]と述べたのは20世紀ドイツの哲学者、テオドール・アドルノ（Theodor W. Adorno、1903～1969年）だ。シェーンベルクら新ウィーン楽派を評価する音楽評論家であり、アルバン・ベルクに師事した作曲家でもある。1956年に雑誌『アクツェンテ』（*Akzente*）に掲載され、その後『文学ノート 1』（*Noten zur Literatur I,* 1958）に収められた小文「句読点」（*Satzzeichen*）は以下のように続く。

> コンマとピリオドは半終止と全終止に相当する。感嘆符は無音で奏でられるシンバル、疑問符は上行するフレーズの強まり、コロンは属七の和音のようなものである。また、コンマとセミコロンの違いを正しく感じることができるのは、音楽形式におけるフレージングの強弱におけるいろいろな重みを聴きわけられる者だけだ。

また、ダッシュ（Gedankenstrich）に関しては、「朗読する声がこの記号によって気づかわしげな沈黙のなかへと落ちていく」[2]と表現される。

このように言語の一要素である句読点を音楽のメタファーで説明するアドルノと逆のこと、すなわち句読点を含む言語のメタファーで音楽を説明することが広く行われていたのが18世紀ヨーロッパである[3]。ルソー（Jean-Jacques Rousseau、1712～1778年）の『言語起源論』（1781年）を待つまでもなく、詩歌と音楽はその起源を共にするという考え方[4]があったこともその背景と考えられる。「言語としての音楽」という認識が特に強かった18世紀半ばのドイツでは、C. P. E. バッハ（Carl Philipp Emanuel Bach、1714～1788年）が、多感主義（Empfindsamkeit）を代表する詩人クロプシュトック（Friedrich Gottlieb Klopstock、1724～1803年）になぞらえて、「言葉の代わりに音」を使った「もう一人のクロプシュトック」と評されている[5]。

当時、弁論法（修辞学、レトリック）を駆使あるいは援用して「聴者の心を揺さぶり、感動させ、作品に内包された感情を聴者に惹起させること」[6]は、音楽にも言語芸術である文学にも共通する目的であったが、文学の領域でドイツ語圏のみならずヨーロッパで多くの人々の心を揺さぶった小説といえば、やはりゲーテ（Johann Wolfgang Goethe、1749～1832年。1782年６月に貴族に列せられ、以降 von Goethe）による『若きヴェルターの悩み』[7]（*Die Leiden des jungen Werthers*、初版1774年、以下『ヴェルター』と略す）を挙げるべきだろう。当時の読者の「心を揺さぶり、感動させ、作品に内包された感情を」あまり

にも強く呼び覚ました様子は、主人公ヴェルターと同様に自殺した者が出版直後に続出したエピソードから広く知られている[8]。

本稿では、ゲーテの『ヴェルター』における句読法、おもにダッシュの特徴とその変遷を、初版（1774年）、改訂版（1787年）で比較検討し、日本語訳でどのように「訳出」されているか分析する。ダッシュはイギリス文学のセンチメンタリズム（sentimentalism、感情主義とも訳される。ドイツ語では Empfindsamkeit に対応する）の影響で18世紀になってドイツに「輸入」された符号[9]であり、文字にならない感情を表すための沈黙の記号として、特にこの時代の著作物において注目に値するからである。

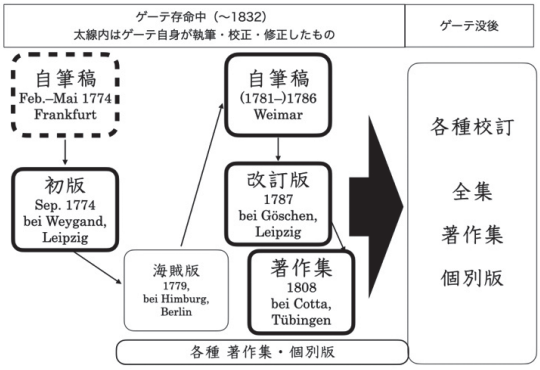
25歳の若きゲーテによる本格的デビュー作『ヴェルター』初版と比較して、約15年を経た改訂版ではダッシュが大幅に増えている。また改訂版のもう一つの特徴は、初版で見られなかったセミコロン（;）の多用である。前述のアドルノは、「声が下降することを拒もうとする」ギリシャ語のセミコロンに対して、ドイツ語のセミコロンは「点と下に突き出た部分とで声の下降を遂行しつつ、また同時に、コンマを自らに取り込むことで声を宙に浮いた状態にしておくような、真に弁証法的な形象（Bild）」だという[10]。音声と文字の狭間に存在する句読符号を手がかりにすることで、文字として記された文学に潜在する「声」や「沈黙」をたとえば楽譜を読んで音をイメージするように聴き取る可能性が増すのではないだろうか。

1．本稿で使用するテクスト

『ヴェルター』には初版（1774年）と改訂版（1787年）が存在するだけではない。初版と改訂版の間には、ゲーテ自身が改訂に際して参照した海賊版もある。1806年になってゲーテは再度『ヴェルター』に手を加えた。その後、現代に至るまで多くのゲーテ全集や個別版の『ヴェルター』が新たに出版されるにあたり、編纂者独自の意図でそれぞれのエディションが作られることになる[11]。その際、以下の可能性が生じる。

①初版のみを掲載
②改訂版のみを掲載
③初版と改訂版の両方を順に掲載
④初版と改訂版を見開きにして掲載

校訂の際には、基準となる底本に手が加えられることも多くある。ドイツ文字（フラクトゥーア、いわゆるひげ文字）をアンティカ体（ラテン文字に現在用いられている書体）に変更することはもちろん、18世紀当時の綴り方を残すかどうか、校訂本の出版時の綴り方に「現代化」するかどうか、明らかな誤植と思われる語の扱いなど、細かい多くの判断が必要となる。



【図】『ヴェルター』の各種テクスト（概要）

本稿で全ての版を網羅することは到底不可能であるため、1999年に出版されたレクラム文庫のスタディー版（Goethe, Johann Wolfgang: *Die Leiden des jungen Werthers*. Studienausgabe. Paralleldruck der Fassungen von 1774 und 1787. Herausgegeben von Matthias Luserke, Stuttgart（Reclam）1999）を使用する。ルゼルケが編纂したこの版は「④初版と改訂版を見開きにして掲載」した版である。同様に２つの版を並べて掲載しているアカデミー版やフランクフルト版は、改訂版『ヴェルター』の底本として1787年に出版された改訂版だけではなく、改訂版の自筆稿も用いた「混合テキスト」（Mischtext）であるのに対し、ルゼルケによるレクラム版は、『ヴェルター』の初版も改訂版も、それぞれ最初に印刷されたテクストを採用している。ただし、このレクラム版の編纂時にも書体の変更、明らかな誤植の訂正など、細かな変更が行われている[12]。こうした作業で最大の注意が払われるのが文字情報であることは当然のことである。句読点や符号に関してはレクラム版についても底本である1774年版、1787年版それぞれの初版本との比較による確認作業が必要になるだろう。

2．ダッシュを好まないヴェルター？

ドイツ語における句読法の歴史に関する記述を集め

た読本のなかに、句読法に関するゲーテの文として『ヴェルター』が引用されている[13]。書簡形式で書かれたこの小説のうち、1772年10月10日付で主人公ヴェルターが書いたという設定の手紙である。アカデミー版（1954年）に所収された1774年版に拠ることが読本巻末の出典一覧からわかる[14]。以下、字下げ、大文字小文字の区別、綴りをその読本のまま転載する。

am 10. Oktober.

Wenn ich nur ihre schwarzen Augen sehe, ist mirs schon wohl! Sieh, und was mich verdrüst, ist, daß Albert nicht so beglückt zu seyn scheinet, als er – hoffte – als ich – zu seyn glaubte – wenn – Ich mache nicht gern Gedankenstriche, aber hier kann ich mich nicht anders ausdrukken – und mich dünkt deutlich genug.

この引用部分は小説の第２部にあたり、ヴェルターが恋してやまないロッテは、すでに婚約者アルベルトの妻となっている。それでもヴェルターはロッテと会い、思慕の念を募らせる一方だ。その物思いのなかでヴェルターは、アルベルトがロッテと一緒になったにもかかわらず幸せそうに見えないと、手紙の宛先である友人に不満を述べている。その際、言いさした発言を中断したり、言い淀んだり、省略したりしたことが多くのダッシュによって示される。しかし、ヴェルター本人はこの手紙のなかで「ダッシュを使うのは好きではない」（Ich mache nicht gern Gedankenstriche […].）けれども、他に言い表しようがないのだという。

レクラム版では一行目の字下げがないだけで、他は綴りや句読点もすべて読本の引用と同じである[15]。初版（1774年版）のファクシミリ版[16]で確認したところ、ここだけでなく小説全体で手紙の先頭の１文字は全てイニシャルキャップ（ドロップキャップ）になっている。これは装飾写本で先頭の文字を２行分の大きさにするレイアウト上の手法で、章や段落の区切りを目立たせる効果がある。

日本語訳のうち、初版を底本としている潮出版社の『ゲーテ全集』（神品訳）を引用する。たいていの『ヴェルター』の日本語訳は縦書きだが、本稿で引用する際には横書きに変更せざるを得ない。視覚的な印象が変わってしまうが、その点は今回の考察対象から除外する。

十月十日

ロッテの黒い目を見ているだけで、ぼくはもう気分がよくなる。ところが、どうだろう、いらいらするじゃないか、アルベルトときたら、あまり幸せそうに見えない、彼が―望んだのに―ぼくなら―断然―もしも―ぼくはダッシュばかり引きたくないが、しかしここのところはこんな風にしか表現できない、―しかしこれでも十分わかってくれると思うが[17]。

ドイツ語原文に対応する部分で原文と同様に６個のダッシュを用いている。ここでダッシュは①文を途中で中断する言い淀み、②後続の内容の省略、③文と文を区切る間（ま）の強調、という３つの機能を担っていると考えられる。日本語訳を参考にすると、①は「彼（er＝アルベルト）」の後、②「望んだ（hoffte）」、「ぼく（ich）」、「断然（≒ zu seyn glaubte）」、「もしも（wenn）」の後、③は最後の「しかし（und）」の前のダッシュと解釈できる。

これらは、修辞法でいう「黙説法」（ἀποσιώπησις, aposiopesis）にあてはまる[18]。ギリシャ語のσιγάω「黙る、静かになる、口をつぐむ」の派生語で、話し手／書き手が沈黙することにより、その部分を意味的に補うことを聴き手／読み手に求める効果がある。手紙という親密なツールを用いている書簡体小説は、もともと読者の感情移入や共感がしやすい。そこにダッシュによる黙説法が用いられることで、手紙の書き手の感情の高まりや言葉につまって語りのテンポが乱れる様子を読者がさらに共感的に読めるような演出になる。

ところが改訂版（1787年）になると、この箇所でダッシュの数が２個コンマに置き換えられて４個に減少している。レクラム版から引用する[19]。

Am 10. October.

Wenn ich nur ihre schwarzen Augen sehe, ist mir es schon wohl! Sieh, und was mich verdrießt, ist, daß Albert nicht so beglückt zu seyn scheint, als er – hoffte, als ich – zu seyn glaubte, wenn – Ich mache nicht gern Gedankenstriche, aber hier kann ich mich nicht anders ausdrücken – und mich dünkt deutlich genug.

綴り方などいくつかの変更[20]に加え、hoffte と glaubte の後のダッシュがいずれもコンマに変更されている。改訂版（1787年）を底本にしている翻訳を２点比較してみよう。まずは、1979年に集英社版世界文

学全集15巻『ゲーテ』に所収された後、改訂を経て2004年にちくま文庫として出版された柴田翔の訳でこの箇所の日本語訳を示す[21]。

十月十日

彼女の黒々とした眼を見さえすれば、ぼくはもう気持が晴れる！　それだのに、腹立たしいことには、アルベルトはそれほど幸せな様子にも見えない—少なくとも、そもそも—ほどには。もし仮にぼくが　—なら、ずっと—。こう線ばかり引きたくないのだが、それ以外どう書けば—それに意味は明白だろう。

ダッシュの数では原文よりひとつ増えて５個で、使用されている位置も変更されている。日本語としてスムーズに思えるのは、ダッシュのうち最初が「文と文との間と区切る間」（前述③）、次の２つは伏せ字のような「内容の省略」（前述②）、最後の２つには「文と文の間を区切る間」（前述③）としての機能が与えられているからだろう。その結果、「文を途中で中断する言い淀み」（前述①）としてのダッシュはこの訳では存在しない。また、この訳では区切り符号の用語としてのダッシュではなく、「線」と訳している点が他の訳と異なっている。これにより、句読法の使用に関するヴェルターの見解というよりも、手紙をしたためているヴェルターが手にするペンの動きの描写と読める訳だ。

それに対して、比較的最近、2015年に集英社文庫ヘリテージシリーズの一冊として出版された大宮訳では、以下のように訳されている[22]。

十月十日

彼女の黒い目を見ると、もうそれだけでいい気持ちだ！　なあ、でも癪なのは、アルベルトが—奴が望んだほどには—もし—俺が—だったらそう思っただろうほどには—幸せそうにみえないってことで俺はダッシュなんか使いたくないんだが、ここじゃあ他に言い表しようがない—それに、これでも十分わかると思う。

初版原文の hoffte と glaubte の後に置かれていたダッシュがコンマに変更されたことで、大宮訳では「奴が望んだほどには」、「だったらそう思っただろうほどには」と一息に続く。改訂版では２個減って４個になったはずのダッシュが、大宮訳では６個に増えている。アルベルト（er）と自分（ich）の対応関係で als er – と als ich – の後のダッシュを再現し、「もし（wenn）」という仮定、すなわちヴェルターの妄想の前後で原文通りにダッシュを置くと、日本語に移した場合、必然的にダッシュが増えてしまう。その結果、「ダッシュなんか使いたくない」と言いながら、言い淀んだり、言葉にできない部分を省略したりして、読み手に共感を求めるヴェルターの文体の特徴が、改訂版の原文よりもむしろ初版に近い形で浮かび上がってくる。

３．激増するダッシュ

前項の引用箇所でダッシュが２つも削除されてコンマへ変更されたり、文法や正書法の面で規範化されたりしたように、1787年の改訂では小説全体でヴェルターの言葉遣いは13年前の初版に比べて落ち着いたものに変更された。レクラム版の編者であるルゼルケは改訂における文体的特徴を次のようにまとめる[23]。

初版がシュトゥルム・ウント・ドラング〔疾風怒濤〕文学の独創的で力強い文体の証であるならば、第２版〔＝改訂版〕はまさしくこの特徴を抹消している。

感情や情熱の迸りをそのままに言葉で表現した文学としての初版に対し、改訂版では「ドイツ古典主義の端緒」[24]といえるほど、「小説世界全体に均衡や安定がもたらされた」[25]というのだ。

「規範化」「標準化」「古典主義」「均衡や安定」といったキーワードに基づけば、溢れかえる不安定な感情や言葉にならない情熱を表現するツールとなるダッシュの使用も改訂版では全体に控えめになるのではないだろうか。だが、その予想は見事に裏切られる。

改訂版では初版よりもダッシュの使用回数が遥かに多い。初版のダッシュが改訂版で他の句読点に置き換えられて減った箇所もあるが、小説全体で用いられているダッシュの数だけでいえば約1.5倍に増えている。他の校訂本と異なり、初版と改訂版を当時出版された状態での綴りや記号を可能な限り再現し見開きで掲載しているレクラム版を用いて、ダッシュの使用回数（２個つながりのダッシュ – – も１回として算出）を比較した結果を以下の表にまとめる。

構成	内容	初版（1774年）	改訂版（1787年）
前半 第１巻／部	編集者の前書き	0	0
	ヴェルターの手紙	90	213
後半 第２巻／部	ヴェルターの手紙	105	123
	編集者から読者へ(引用内)	71（58）	77（64）
合計		266	413

【表】『ヴェルター』初版と改訂版のダッシュ使用回数

初版の段階からダッシュが多用されてはいるが、改訂版では特に前半においてダッシュの使用回数が激増した。たとえば、ヴェルターがロッテと出会った日の舞踏会で窓の外の雷雨がやんでいく様子にクロプシュトックの詩「春の祝い」（*Die Frühlingsfeyer*、1759年）を思い浮かべて感動したロッテが「クロプシュトック！」と呟いてヴェルターの手に自分の手を重ねる場面でも、初版では „Sie [...] sagte – Klopstock! “ と１個だけのダッシュが改訂版では „Sie [...] sagte – Klopstock ! – “ と２個に増えている。より顕著な例として、初版（1774年）で１個のみだったダッシュが、７回使用され合計８個に増えた改訂版の箇所を引用する。

> Es ist wunderbar: wie ich hierher kam, und vom Hügel in das schöne Thal schaute, wie es mich rings umher anzog. – Dort das Wäldchen! – Ach könntest du dich in seine Schatten mischen! – Dort die Spitze des Berges! – Ach könntest du von da die weite Gegend überschauen! – Die in einander geketteten Hügel und vertraulichen Thäler! – O könnte ich mich in ihnen verlieren! – –[26]

初版では、最後の verlieren! の後に１個だけダッシュがある。その唯一のダッシュも改訂版では２個の連続ダッシュに変更されている。

人間社会の制度や慣習にうまく適応できないヴェルターは、小説全体を通してロッテだけでなく自然への憧憬を抱き続ける。上の引用箇所は、小説の前半、６月21日付のヴェルターから友人ヴィルヘルムに宛てた手紙の一部だ。ヴェルターはロッテに夢中で幸福感に浸っている。その彼が、近隣の村、ヴァールハイムへ向かう丘陵の散歩道について語る部分である。

【柴田訳】

> まったく不思議なことだ。ここに登ってきて、丘から美しい谷間を見はるかすと、まわりに拡がるすべてが僕の心を魅した。あそこに森がある！―ああ、あの森蔭に身をひそめることができたなら！―あそこに山の頂上が！―ああ、あそこに立って、果てしない世界を眺めることができたなら！―あの重畳する丘々となじみ深い谷間の数々！―おお、あの蔭をさまよい歩くことができたなら！[27]

【大宮訳】

> 摩訶不思議さ。ここに来て、丘の上からいかした谷を眺めたり、辺りの様子に惹き込まれたりするのは。 ―あそこにはちょっとした森！ ―ああ、あの暗がりに紛れ込みたい！ ―それにあの山頂！ ―ああ、あそこから辺りを広々と見渡したい―互い違いに連なっていく丘に、谷また谷の親密そうなこと！ ―ああ、あの中に迷い込んじまいたい！ ―[28]

ドイツ語原文で７回使用されたダッシュのうち、柴田訳は５回分のみを、大宮訳は７回全てを翻訳に取り入れている。柴田訳において省略されたのは、引用３行目の「僕の心を魅した。」の後にあてはまるはずのダッシュと、最後の感嘆符の後の連続ダッシュである。大宮訳では、使用回数は同じだが、原文の連続ダッシュは反映させず、ダッシュ１個として訳している。

この引用箇所では、ヴェルターの発言がダッシュによって中断され、沈黙が次々に立ち現れる。大宮訳で「ちょっとした森！」「あの山頂！」のように訳されているように、「小さな森」（Wäldchen）、「山頂」（Spitze des Berges）、「丘や［…］谷」（Hügel und [...] Thäler）という自然の地形や場所が、動詞を省略して感嘆符を伴った形で２個のダッシュに挟まれている。初版にはないこの符号を差し挟むことによって生じる間で、丘の上に立つヴェルターが自分を取り囲む自然の風景をひとつひとつ驚嘆しつつ味わっている様子が表現されている。また、「あそこの森！」、「あそこの山の頂！」の後には Ach könntest du [...]! が続くが、これは手紙の宛先であるヴィルヘルムに向けた言葉ではなく、自分の中の自分に対して発した「（自分が）～できたらいいのに！」という願望である。構造的に

列挙された自然への感嘆のうち、最後の３回目の丘と谷に対する感嘆に続くのは、人称代名詞 ich で表された主体としての自分である。親密に結びつきあっているように見える自然の風景のなかで自分も「姿を消してしまえたらいいのに！」という、物語の結末を予感させる心の叫びで締めくくられる。その発言の後、初版では１個、改訂版では２個連続で置かれたダッシュは、このヴェルターの発言の余韻を読者に強く印象づける。このダッシュの効果は、翻訳に反映させることが望ましいように思うが、日本語で連続ダッシュにすると視覚的にあまりにうるさいので、大宮訳でも１個のみにしたのだろうか。

ここで先ほどの表に戻って、後半の「編集者から読者へ」の部分にも着目したい。「編集者」[29]とは、作品の始めに一人称の語り手として登場して、「かわいそうなヴェルター」[30]の物語を読者に提示する、いわばナレーターのような登場人物である。後半の「編集者から読者へ」では比較的少ないとはいえ、それでも両方の版で70回以上ダッシュが使用されている。それは、ヴェルターの最期に至る経過が報告されるなかで、ヴェルターの手紙や、彼がロッテの前で朗読する詩『オシアン』が「編集者」による地の文に差し挟まれ、それらの引用部分のなかでダッシュが使用されているためだ。

「編集者」自身の声としてのテキストでダッシュが用いられるのは、両方の版に共通して10回程度であり、だがそれは前述した「③文と文を区切る間（ま）の強調」の機能に近い。だがそれはヴェルターの発言においてそうだったような、次の文の前にあえて沈黙を挟むためではない。発言者の交替を示す、映像でいえばカメラのアングルの切り替えのような機能、あるいは時間経過を含めた場面転換を表すトランジションのような機能をダッシュが担う。『オシアン』の朗読で気持が昂ぶったヴェルターがいまや人妻となったロッテを抱きしめ唇を重ねてしまい、ショックをうけた彼女が隣の小部屋に閉じこもってしまった場面[31]を一例として挙げる。

【初版（1774年）】
[…] gieng er zur Thüre des Cabinets, und rief mit leiser Stimme, Lotte! Lotte! nur noch ein Wort, ein Lebe wohl! – Sie schwieg, er harrte – und bat – und harrte, dann riß er sich weg und rief, Leb wohl, Lotte! auf ewig leb wohl!

【改訂版（1787年）】
[…] ging er zur Thüre des Cabinets, und rief mit leiser Stimme: Lotte! Lotte! nur noch Ein Wort! ein Lebewohl! – Sie schwieg. Er harrte und bath und harrte; dann riß er sich weg und rief: Lebe wohl! Lotte! auf ewig lebe wohl!

ヴェルターはドアの外から小声で（mit leiser Stimme）ロッテを呼び、永遠の別れを告げようとする。引用符が使われていないのでわかりづらいが、Lotte!（「ロッテ！」から ein Lebe wohl/Lebewohl!（「さよならを」）までがヴェルターの発言である。その後、ナレーションがロッテの様子（Sie schwieg […]「彼女は黙った」）を述べるところでダッシュが使われる。ヴェルターから「編集者」への話者交替を示すダッシュは両方の版に共通している。

ヴェルターがロッテの反応を待ち望み（harrte）、懇願（bat/bath）した部分で、初版ではダッシュを用いて「彼は待ち望み―そして懇願し―また待ち望んだ」と、沈黙の時間の経過が表現される。しかし、改訂版ではそのダッシュが削除された。その結果、ダッシュの欠如により視覚的な「間」がなくなり、und（「そして」）で畳みかけるような字面になる。言葉のテンポが速まり、「待って頼んでまた待った（harrte und bath und harrte）」と早回しの効果になるという解釈も可能ではないだろうか。その場合、ヴェルターの焦りがより明確になるだろう。

では、日本語訳ではこの箇所のダッシュはどのように反映されているだろうか。

【初版（神品訳）】
彼は［…］隣の小部屋に通ずるドアのところへ行って、小さい声で呼んだ。
「ロッテ、ロッテ、もう一言だけ、お別れを」
　ロッテは返事をしなかった。彼は待った。―頼んだ。―待った。ついにドアから離れて、叫んだ。
　「さようなら、ロッテ、永久に、さようなら」[32]

神品訳では、ロッテの発言が鉤括弧（「　」）でくくられており、その後改行と字下げがされているため、発言者の交替を示すダッシュは不要とみなされたのか、反映されていない。初版のみに存在する、時間経過を示すダッシュはそのまま使われているが、毎回動詞の後に句点（。）を置いていることで、ひとつひとつの行為の区切れと時間経過が明確である。

改訂版のダッシュは、前項で示した２つの日本語訳のいずれでもそのまま反映されている。

【改訂版（柴田訳）】
彼は［…］隣の小部屋との境の扉に近よって、低い声で呼びました。ロッテ！　ロッテ！　もうひと言だけ！　お別れの言葉だけを！―ロッテは答えませんでした。ヴェルテルは待ち、頼み、待ちました。やがて彼は身を引き離し、叫びました。さようなら、ロッテ！[33]

【改訂版（大宮訳）】
あいつは［…］小部屋のドアのほうへ行き、小さな声でこう呼んだ。

「ロッテ！　ロッテ！　もう一言だけ！　さよならを！」

――彼女は黙っていた。あいつはじっと待ち、頼み、またじっと待った。それから身を翻し、こう叫んだ。

「さよなら、ロッテ！　永遠にさよなら！」[34]

柴田訳は、引用符のないドイツ語原文と同じく鉤括弧を使用せず、話者交替のダッシュがヴェルターの台詞と「編集者」のナレーションの区切りとする。それに対し、大宮訳はドイツ語原文にはない a）台詞の鉤括弧、b）改行、c）行空けの３つを駆使している。話者交替は鉤括弧の使用ですでに明示されており、さらに１行分の空白が独自に差し込まれているので、初版の神品訳と同じようにダッシュを省略してしまうことも可能であっただろう。「彼女は黙っていた」の前にあらためて置かれることで、ここでのダッシュの機能は、話者交替ではなく沈黙の時間経過を示す機能を担うことになる。

４．ダッシュのさまざまな機能

これまで見てきたように、ダッシュにはさまざまな機能がある。特に改訂版の『ヴェルター』では初版よりも数が増えただけではなく、その機能のヴァリエーションも増えている。ここでは具体例をすべて挙げることができないが、仮に分類すると８項目になるだろう。

a. 名前の省略（伏せ字として）
b. 文の途中での中断（言い淀み）
c. 文と文のあいだの間（休止）
d. 場面転換
e. 話者の交替（引用符を用いない台詞の後）
f. 挿入文の前後
g. 呼びかけの前
h. 強調したい語の前後

『ヴェルター』の初版（1774年）から改訂版（1787年）への変遷にちょうど重なる1774年から1786年にかけてドイツ語辞典[35]を編纂し、ブライトコプフから出版したのがヨハン・クリストフ・アーデルング（Johann Christoph Adelung、1732～1806年）である。彼は学校教育でも規範となるようなドイツ語の規範を辞書だけではなく文法書によっても提示した。そのうちの一冊が同じくブライトコプフから1782年に出版された２巻本『詳解ドイツ語体系　学校用ドイツ語文法解説のために』（*Umständliche Lehrgebäude der Deutschen Sprache zur Erläuterung der Deutschen Sprachlehre für Schule*）である。その２巻目（第２部第５章）の句読法をまとめた記述でダッシュについて一言だけ触れられている。

中止された言説の記号は＝＝、あまりにひどく濫用されることの多いダッシュ――もまたそのうちの一つである。[36]

これだけでは、たとえば10月10日付のヴェルターの手紙のような、感情の高まりや言い淀みによって中断された発言のみにダッシュを用いるように思われる。

ところがその後、『ヴェルター』改訂版が出版された翌年の1788年に、アーデルングは『ドイツ語正書法完全手引』（*Vollständige Anweisung zur Deutschen Orthographie*）で句読法についてより詳細に解説し、ダッシュの使用法を７項目に分類した[37]。これらの項目をリストにまとめると以下のようになる。

１. 名前や単語の省略
　用例　出典なし
２. 中断された言説　（「抑制線（Hemmstrich）」とも）
　用例　レッシング『ミス・サラ・サンプソン』より
３. 関連の欠如　（しばしば会話で）
　用例　レッシング『エミーリア・ガロッティ』より
４. 短い会話で発言者の名前が自明の場合
　用例　出典なし[38]

5. 予期せぬ事柄の前で　（強い休止）
　用例　出典なし
6. 中断された言説　（強い休止、特に激情を表す）
　用例　レッシング『ミス・サラ・サンプソン』より
　　レッシング『フィロータス』より
7. 特に強調する語の前で　（読者の熟考を喚起する）
　用例　レッシング『ミス・サラ・サンプソン』より

『ヴェルター』におけるダッシュの機能のうちf. とした「挿入文の前後」以外は、アーデルングの分類と一致する。また、アーデルングが文学作品から引用した用例にはレッシングの戯曲、特に『ミス・サラ・サンプソン』（*Miss Sara Sampson*、1755年）が目立つ。また、小説内でヴェルターがピストル自殺した際に書見台に開かれていた本である『エミーリア・ガロッティ』（Emilia Galotti、1772年）も、論理的に飛躍する会話におけるダッシュの用例として挙げられている。いずれもドイツ文学において多感主義の代表作として挙げられる悲劇作品である。

レクラム版の編纂者ルゼルケが述べていたように、初版から改訂版への変更でたしかに疾風怒濤特有の語彙や言葉の勢いは失われたかもしれない。かわりに、改訂版ではダッシュを大幅に増やし、そのあらゆる機能を駆使したことで、多感主義の特徴が強まった。その点では疾風怒濤よりも時代を遡らせてクロプシュトックやレッシングといった一つ前の時代感あふれる文体への置き換えとも言えよう。また、18世紀当時の印刷におけるダッシュは現代の印刷よりも長くはっきりしているため、改訂版におけるダッシュの増加は、視覚的な「異物性」[39]を発揮して、ある種の異化効果をもたらしたと思われる。この符号に着目すると、改訂版『ヴェルター』は古典主義的な「均衡や安定」にはほど遠いし、初版における言語や文体の特徴や自由さを改訂版が「平板化」[40]したとも決して言えない。

改訂版『ヴェルター』の出版にあたり、正書法と句読法を校正したのは、ゲーテとの縁で1776年からヴァイマル公国の教区総監督となっており、また複数の学校の校長職にもあったヘルダー（Johann Gottfried Herder、1744 ～ 1803年）だった[41]。

そもそも初版からヴェルターの激しい感情が「多くの感嘆符やダッシュに反映されている」ことには、若きゲーテに特にイギリス文学の手ほどきをしたヘルダーの影響がみられる[42]。1772年７月にゲーテは、いずれ『ヴェルター』の物語の舞台となる町ヴェッツラーでヘルダーの『現代ドイツ文学断章』（*Fragmente zur Deutschen Literatur*、1767年）を読んで強い感銘を受けている。この著作においてヘルダーは、その師ハーマン（Johann Georg Hamann、1730 ～ 1788年）からの影響を強く受け、青年期の言語は「感覚的で大胆な形象が豊富だった。それはまだ情熱の表現であり、さまざまな連関に縛られていなかった。複合文は好き放題にばらばらだった。―見よ！それが詩的言語、詩的複合文だ」[43]と情熱的に綴っていた。ハーマンからヘルダーへ、ヘルダーからゲーテの『ヴェルター』へと脈々と受け継がれたのが、根源的かつ詩的言語における情熱の表現としてのダッシュだったのである。

5．今後の展望

『ヴェルター』の改訂版にはゲーテの自筆稿が残されており、現物はヴァイマルのアンナ・アマーリア図書館に保管されている[44]。ヘルダーによる校正を跡づけることが可能であれば、さらにダッシュの系譜が明らかになるだろう。周辺資料のさらなる調査も必要である。

本稿で明らかになったように、18世紀ドイツ語圏におけるダッシュ（Gedankenstrich）は、書き手あるいは語り手の「思考（Gedanke）」や感情を表現するだけでなく、むしろ読み手や聴き手の思考、解釈や共感を要求する、いわばゼロ記号である。たとえば関連性理論の視点から「沈黙の意味」をさぐる文章[45]のなかで橋元がケージの《４分33秒》を例に挙げて述べているように「雄弁な沈黙」は受け手に意識的な思考や解釈処理を強く促す。そのため、「かわいそうなヴェルター」の心情に思いをめぐらせる装置としてもダッシュは有効といえよう。ただ、読み手に対して思考や解釈や共感を強いるこうした符号が日本語の特徴や読書の営みに馴染むかどうかは別の問題である。

さまざまな機能をふまえ、どのダッシュを翻訳に反映させるかどうかの判断のためにも詳細な分析が今後も必要である。

註

（１）Adorno, Theodor W.: *Satzzeichen*. In: *Akzente* 3（1956）S. 569–575. Adorno（1974）, S. 106. 日本語訳、128頁を参照。

（２）Adorno（1974）, S. 108f. 日本語訳、130頁。

（３）ボンズ『ソナタ形式の修辞学』（2018）、特に第2章「修辞学と18世紀における音楽形式の概念」を参照。1991年にアメリカで出版された原書のタイトルは *Wordless Rhetoric*（『言葉のない修辞学』）。

（4）たとえば、1772年に出版されたヘルダー『言語起源論』（日本語訳、2017年、80頁）やハーマン「美学提要」（日本語訳、2002年、上巻116頁）など。

（5）ボンズ、前掲書、100頁。

（6）久保田（2020）、46頁。また、マッテゾンの『旋律学の真髄』（1737）に現れる「音楽の句読法」については26頁以降。

（7）主人公の名前 Werther は、日本で「ウェルテル」と呼び習わされてきたが、本稿ではドイツ語の発音に近いカナ表記「ヴェルター」とする。最近出版された日本語訳も「ヴェルター」の表記を採用している。

（8）たとえば、仲正（2017）、19頁。

（9）この点については、国立音楽大学『研究紀要』第55集の拙文で指摘した。

(10) Adrono（1974），S. 107. 日本語訳、128頁以下。

(11) 校訂史に関してはレクラム版（1999）のルゼルケによるあとがきを参考にした。各種全集についてコンパクトな説明がある「ゲーテ 著作目録」（久山雄甫編）は、大宮編『ゲーテ』（2015）771 ～ 783頁。

(12) レクラム版（1999）、S. 309。

(13) *Texte zur Geschichte der deutschen Interpunktion*（1984）S. 75.

(14) Ibid. S. 347.

(15) レクラム版（1999）、S. 174。

(16) ファクシミリ版（1994）、S. 151。インターネットの Google Books で初版（1774年）も改訂版（1787年）もアクセス可能ではあるが、解像度のばらつきなど問題があるため、本稿では参考程度とした。

(17) 神品訳、69頁。

(18) 黙説法については、瀬戸（2002）、117頁以下「黙説法　黙って伝える」の項を参照。

(19) レクラム版（1999）、S. 175。

(20) 先頭の a を大文字へ、月名の綴りを Oktober から October へ。当時の辞書によると c での表記が「正しい」。ゲーテが改訂作業で参照した（ゲーテから出版者ゲッシェン宛の1786年7月2日付書簡に明記あり）アーデルングが編纂した辞書でも c で表記されている。Adelung（1798），S. 578.
http://www.zeno.org/Adelung-1793/K/adelung-1793-03-0578（最終アクセス日2021年8月29日）
他には、es の e を脱落させる話し言葉をそのまま綴った mirs を mir es へ。初版の verdrüst をより標準的な動詞 verdrießen に変更して verdrießt へ。綴りの変更では ausdrükken を ausdrücken へ。いずれも学校で習うような標準的ドイツ語表記への変更であり、「粗削り」な初版から「洗練された」改訂版への変更という全体的な傾向にあてはまる。初版と改訂版の違いについて簡潔にまとめているのは、林（2019）、46頁。

(21) 柴田訳、Kindle 版 No. 1785。訳文で日付は下揃えになっている。この訳や次の大宮訳では原文の感嘆符もそのまま反映されている。

(22) 大宮訳、129頁。このようにヴェルターの一人称を「俺」と呼ばせる日本語訳は、明治期に森鷗外がすでに行っていたという。同書の作品解説、746頁を参照。

(23) レクラム版（1999）、S. 299（ルゼルケによるあとがき）。フランクフルト版の解説、920頁以下も参照のこと。

(24) レクラム版（1999）、S. 300で引用されているハンネローレ・シュラッファーによる表現。出典はミュンヒェン版846頁。

(25) 大宮訳、747頁（作品解説）。

(26) レクラム版（1999）、S. 57。

(27) 柴田訳、Kindle 版 No. 534。

(28) 大宮訳、43頁。

(29) レクラム版（1999）、S. 204–205。この「編集者」は、少なくとも改訂版ではヴェルターの友人ヴィルヘルムと同一人物ではない。林、148 ～ 159頁。ただし、その根拠となる箇所が初版にはなく、改訂版での加筆部分である。そのため、初版に関しては決定的なことは言えない。

(30) レクラム版（1999）、S. 6–7。

(31) レクラム版（1999）、S. 254–255。引用文内の省略は筆者による。この箇所ではダッシュの変更だけではなく、コンマがピリオドやセミコロンに改訂版では変えられている。特にセミコロンへの変更に関しては改訂版の句読点の一つの特徴ではあるが、それについては別の機会に譲りたい。日本語訳の縦書きの文章ではセミコロンをそのまま使用できないため、その翻訳の問題も改めて検討する必要がある。

(32) 神品訳、94頁。この引用文内の省略は筆者による。以下、同様。

(33) 柴田訳、Kindle 版 No. 2555。

(34) 大宮訳、184頁。

(35) Adelung, Johann Christoph: *Versuch eines vollständigen grammatisch-kritischen Wörterbuchs Der [sic] Hochdeutschen Mundart*. 5 Bände. 1774–1786.

(36) Adelung（1782），Bd. 2, S. 796.

(37) Adelung（1788），S. 388–392.

(38) この用例は1777年に出版されたモーゼス・メンデルスゾーンによる、ユダヤ教のラビによる短い物語の翻訳からの引用。

http://ds.ub.uni-bielefeld.de/viewer/image/2102881_002/56/（最終アクセス日2021年9月2日）

(39)大宮訳、747頁（作品解説）。

(40)レクラム版、S. 299。

(41)レクラム版、S. 297。

(42)Leis, S. 45 ff.

(43)Herder（1985），S. 183. この箇所にはハーマンの「美学提要」（*Aesthetica in nuce*、1760年）の「詩歌は人類の母語である」以下の文からの影響が特に強い。

(44)この自筆稿に関しては、レクラム版の編者でもあるルゼルケにより、校訂版が出版されている。ただし、ファクシミリではないため、自筆稿では濃淡や長短の違いがあると思われるダッシュのヴァリエーションが確認できない。

(45)橋元（1995）、47頁。

参考文献

Adelung, Johann Christoph: *Umständliches Lehrgebäude der Deutschen Sprache zur Erläuterung der Deutschen Sprachlehre für Schulen.* Leipzig 1782.
https://visuallibrary.net/vd18/content/titleinfo/14001
（最終アクセス日2021年9月2日）

Adelung, Johann Christoph: *Vollständige Anweisung zur Deutschen Orthographie.* Frankfurt und Leipzig 1788.
https://www.digitale-sammlungen.de/en/view/bsb11104959?page=,1
（最終アクセス日2021年9月2日）

Adelung, Johann Christoph: *Grammatisch-kritisches Wörterbuch der Hochdeutschen Mundart*, Band 3. Leipzig 1798.
http://www.zeno.org/Adelung-1793（最終アクセス日2021年8月29日）

Adorno, Theodor W.: *Satzzeichen.* In: *Noten zur Literatur I.* Berlin/Frankfurt am Main, 1974, S. 161–172.

[Goethe, Johann Wolfgang:] *Die Leiden des jungen Werthers.* Leipzig 1774.
https://books.googleusercontent.com/books/content?req=AKW5Qaev8lJ4sgfDxkdhfnEi-L-8QUOw8iy_d-K8FTEVG3y1ZFFvddXxtLzNOO4exqwQJBB2nRfPytdp6vpi-VXg0fNiVCdx5KwoRrFcZj-rHeLGxdOZNlEqSukiMbmuaXwov-cauVfPnueUFazgpjpelQjb_laJgrkGZNTfzeRfsFPAgDRYEOQ9wM8JYt6J4ajkLpOxkE56eZ12RwDAYSiHX1QXKFaK2Zq9nWmvm2I_-i7UjsOTDAR-WH9UqqL4rGl3eyVmnYs69FXbGtB3XaeFrvpIDkKSyQ（最終アクセス日2021年8月28日）

Goethe, Johann Wolfgang von: *Leiden des jungen Werthers.* In: *Goethe's Schriften. Erster Band.* Leipzig 1787.
https://books.googleusercontent.com/books/content?req=AKW5QadVQy2DPSPFSANvJnWMBOnav8R03puuZybSVbKbLzvC2Men7QOyQzP8S64zvxs71jeB8C4sQ2OD2Kt8ghvQ82vO39kOszm5FqNzoU6e1XOHw8rZwKSN5BtZqr47j69PgFS7hPHNiHAGZuPVOTdSxoRKSicjVw5vw1dkJhvSD-ayLwVfyw5rSiIqcnHrf7ThNrkAxD_lo06lGPLpDZsfEEJWeyxQqKyXTrKd8deBBtV87TWRarQf2Zx6MFtqx9XpfRbR1s4aBSh6PrY7bdrgihSxoAebEQ（最終アクセス日2021年8月28日）

Goethe, Johann Wolfgang: *Die Leiden des jungen Werthers.* In: Ders. *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens.* Bd. 2/2, Teil 2. Hrsg. von Hannelore Schlaffer, Hans J. Becker und Gerhard H. Müller, München 1987.（＝ミュンヒェン版）

Goethe, Johann Wolfgang: *Die Leiden des jungen Werthers.* In: *Johann Wolfgang Goethe, Sämtliche Werke.* Bd. 8. Hrsg. von Waltraud Wiethölter, Frankfurt am Main 1994.（＝フランクフルト版）本稿で使用したのは、同書のDeutscher Klassiker Verlag im Taschenbuch 版（Bd. 11, 2. Aufl. 2018）。

Goethe, Johann Wolfgang: *Die Leiden des jungen Werthers.* Studienausgabe. Paralleldruck der Fassungen von 1774 und 1787. Hrsg. von Matthias Luserke, Stuttgart 1999.（＝レクラム版）

Goethe, Johann Wolfgang von: *Leiden des jungen Werthers.* Edition der Handschrift von 1786. Hrsg. von Matthias Luserke. Weimar 1999.

Herder, Johann Gottfried: *Über die neuere deutsche Literatur. Erste Sammlung von Fragmenten.* In: Ders. Werke in zehn Bänden. Bd. 1, Hrsg. von Ulrich Gaier, Frankfurt am Main 1985.

Leis, Mario: *Lektüreschlüssel XL. Johann Wolfgang von Goethe: Die Leiden des jungen Werther.* Ditzingen 2018.

Texte zur Geschichte der deutschen Interpunktion und ihrer Reform. Hrsg. v. Burckhard Garbe, Hildesheim, Zürich, New York 1984.

Seifert, Siegfried: *Ein Roman.* Leichlingen 1994.（＝ファクシミリ版。ザイフェルトによる解説の小冊子と同じケースに、手書きシリアルナンバー（1500部限定）付きでゲーテ『若きヴェルターの悩み』初版（1774年版）のファクシミリ版が入っている。）

テオドール・W・アドルノ『アドルノ 文学ノート　1』三光長治・恒川隆男・前田良三・池田信雄・杉橋陽一共訳（みすず書房）2009年。
久保田慶一『音楽分析の歴史』（春秋社）2020年。
［ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ］「若きヴェルターの悩み（初版）」神品芳夫訳、『ゲーテ全集　第六巻』（潮出版）1979年初版、2003年新装普及版。（＝神品訳）
ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ『若きヴェルテルの悩み』柴田翔訳（筑摩書房）2004年。（＝柴田訳）現在 Kindle 版のみ入手可能。
『ゲーテ』大宮勘一郎編（集英社）2015年。（「若きヴェルターの悩み」大宮勘一郎訳、7 ～ 200頁＝大宮訳）
仲正昌樹『教養としてのゲーテ入門 「ウェルテルの悩み」から「ファウスト」まで』（新潮社）2017年。
瀬戸賢一『日本語のレトリック』（岩波書店）2002年。
ヨハン・ゲオルク・ハーマン『北方の博士・ハーマン著作選』川中子義勝訳（沖積舎）2002年。
橋元良明「沈黙の意味」『月刊 言語』1995年4月号（大修館書店）1995年、40 ～ 47頁。
林久博編著『対訳 ドイツ語で読む「若きヴェルターの悩み」CD 付き』（白水社）2019年。
ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー『言語起源論』宮谷尚実訳（講談社）2017年。
マーク・エヴァン・ボンズ『ソナタ形式の修辞学　古典派の音楽形式論』土田英三郎訳（音楽之友社）2018年。

本研究は JSPS 科研費19K00527の助成を受けたものです。